

宿縁

一月号

如来さんはどこにおる
如来さんはここにおる



一日たった二日たった三日たった
たった今おしにかけてくる火の車
弥陀たのむより逃道はなし
急ぐとも浮世のことは水の泡
急がにやならぬ後生忘れな

元日の朝を迎えたと思ったら、またたくまに松の内も過ぎ去りました。だからこそ、右の句のごとく「仏法のこととは急げ急げ！」なのです。

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号
浄土真宗 本願寺派
中原寺
TEL 〇四七―三七二―〇二九二
FAX 〇四七―三七二―〇二六二

今年こそはと、新たな第一歩を踏み出す気持ちは大切ですが、何処に向かつて歩み出すのかはつきりしていなければたちまち挫折してしまいます。

目指すことは何か。人間のおこす希望や夢ではなく、崩れないもの、ゆるぎないもの、どんなことがあっても安らぎが生まれてくるものが「仏法」念仏の世界」です。

仏を信じるといふことの本来の意味は、浄土真宗の救いの根拠になる経典「無量寿経」の、阿弥陀仏の根本の願いを明らかにした第十八願に「信樂(しんぎょう)」という言葉があります。そしてその願いを成就されたという文章では、それを「信心歓喜(しんじんかんぎ)」と訳しています。これは信樂の「信」を丁寧に「信心」、そして樂を分かり易く「歓喜」、歓び喜ぶと訳しました。信樂あるいは信心歓喜の原語(インド語)は、チッタ・プラサーダといいます。チッタというのは心のことで、プラサーダというのは澄淨・喜悅と漢訳しています。心が澄んで、安らかになり、喜びが生まれて、新しく何かが見えてくる。これをチッタ・プラサーダといい、昔の中国の翻訳者がそれを「信樂」や「信心歓喜」と訳しました。これを置き換えて表現すると、目が覚めることと目覚めたいと思えます。目が覚めると何かが見えてくる、そして喜びが生まれてくる、安らぎが生まれてくるという意

味合いをもっています。信じるということとは、一般的には、信じる私と信じられる仏さま・神さまという、信じる主体と信じられる客体、この主と客の関係の中で、二元的に信じるという言葉が使われ、理解されます。しかし仏教でいう「信じる」というのは、そういう二元的な意味ではなく、チッタ・プラサーダ(信心)は何かに対してではなくて、私の心そのものが澄んでくる。澄んでくるというの、今まで見えなかったものが見えてくるという意味を表します。また「さとり」というのも同じです。「さとった」というのは、何かに対してさとったというのではなく、私自身に今まで見えていなかったものが、新しく見えてくるということなのです。これを「めざめ」という言葉に置き換えますと、寝ていた、夢を見ていたのが、目が開いて元気になるということなのです。夜が明けるといふことも同じで、夜という真つ暗な世界と、朝という明るい世界とが、背中合わせに、同時に成立するのを、夜が明けるといふのです。例えば「お寺の梵鐘が鳴った」といふのは、何が鳴ったかということを考えてみましょう。「鐘が鳴った」といふと、「いや、鐘が鳴るはずがない。いくら長い時間ぶらさげたって、鐘が鳴るはずはない。撞木で叩かなくや音はでない」「それなら撞木が鳴るのか」「撞木が鳴るはずがないじゃないか。一体どちらが鳴ったというのだ」と問いつづけます。「さとり」とか「信じる」といふことは、そういう二つの世界、明るい世界と暗い世界、その矛盾対立する世界が、同時に成りたつという構造をもっています。それを「信心」といふのです。だから、世俗的な意味で「何

かを信ずる」といふた時の、二元論的な話とは全く違い、何かに対してではなくて、自身の心が澄んで、そして何かが見えてくるようになることを「信心」といふのです。親鸞聖人はその信心について、「往生は一定と信じる」といふと同時に「地獄は一定と信じる」といいます。一定というのは一つに定まっているということ。普通「浄土と地獄」は対立するものですが、その両者が一定(いちじょう)ということになると、二種一具の関係にあつて、別々のものでも矛盾するものでもなく、信心の両面を表しているのです。人間の世界はすべてを対象化し、分別していく世界ですから、比較地獄から抜け出られません。よく「丸裸にならんと仏法はわからん」といいますが、人間のはからいを持ち出してどんなに仏法を学び聞いてもわかりません。ところで、信心は、どうしたら私において成り立つのでしょうか？ 親鸞聖人は「この如来、微塵世界にみちみちたまへり。すなはち一切群生海の心なり。」(唯信鈔文意)と述べられています。あらゆる生きとし生けるものの生命の中に、仏はみちみちている、仏は来ているといふのです。仏に目が覚める、私の生命の中に来ている、仏が、私にとって実感できるといふことは、「阿弥陀仏の声を聞く」ことです。お念仏を申して、それが仏の呼び声であると聞くのです。そしてそれがほんとに聞こえてくるようになり、それを実感し、体験したら、それがどうか本気になって聴聞すると必ず南無阿弥陀仏のこのはたらきが明らかになります。

【寺灯雑記】

○一年の汚れを落とす清掃作業

12/28

迎える新年を目前にして、山門からの石段をはじめ境内の清掃に10名のみなさんがご奉仕くださいました

長靴姿に、今回購入した高圧洗浄機、ホース、たわし、雑巾等を駆使して午前10時から寒空の下で作業に精を出しました。

清掃後の冷えきった体を芯から温めてくれたのは、いつものように坊守さん手作りの豚汁とおにぎりでした。

今年もみなさんご苦労さまでした。

○お念仏の声とともに新春を祝う

1/1

仏暦2558年の年明けは午前8時から元旦修正会で始まりました。

いつもと違う朝のしじまに清らかな行事鐘が響く中、多くの参詣者は心の装いを新たにしてお念仏の声高らかに正信偈を唱和しました。

ご住職が「元旦章」を拝読後、前住さんから「新たな人生」と題して年頭法話をいただきました。お話は「新たな年の始まりを、念仏とともに迎えることは、何よりも大きなよろこびである。人生は、真実の仏の願いとそれのことばに出遇うことによって、限りある命の人間で終わる身が仏になるべき身と成る。しっかりとした聴聞によって、いま一度みずからを見つめなおし、確かな足どりで人生を歩みたいものである。」と聞かせていただきました。

そして仏前の盃にお酒が注がれたあと、参詣

者一同でご流盃の儀となり新年を祝いました。

尚、年号の表記は西暦(2015年)、元号

(平成27年)が一般的ですが仏暦(2558年)とは、釈尊が入滅したとされる年、またはその翌年を元年とする紀年法です。東南

アジアの仏教徒の多い国などで用いられています。西暦とは、イエス・キリストが生まれたとされる年の翌年を元年とした紀年法。元号は大化の改新(645年)の時に「大

化」が用いられたのが最初であるとされますが、明治時代以降は天皇の一代ごとに年

号一つと決められました。そうしたことから私たち仏教徒としては

仏暦の意味を知っておくことが大切でしょう。

○婦人会員が総会と新年会に集う

1/10

寒に入り一段と寒さが募ってきた中で婦人会員37名が出席して平成27年度総会と新年会が開催されました。

総会に先立ち、親鸞聖人のご正忌に因み坊守さんが代表焼香し、みんなで正信念仏偈をお勤めしました。

総会では26年度事業及び決算の承認、引き続き新年度事業計画、予算案が提示され、同じく原案通り全員一致で可決されました。今年のみりのり会(千葉組仏教婦人会連盟創立25周年記念大会)が6月25日に千葉市教育会館で予定され、講師に創立時に深く携わった当寺前住職が記念法話することが決まっています。

最後にご住職から「婦人会みなさまのい

協力があつてこそ当寺も様々な法座、行事が行われていることを大変うれしく思います。今年もお念仏教化に一層励みましよう。」との挨拶があり、無事総会を終えました。

そのあと、聞法会館に場所を移して新年会が賑やかに行われました。美味しいお弁当を

いただきながら和気藹藹の歓談後、今年の演芸は多士済々。先ずお正月にふさわしく篠田

国代さんが日本舞踊「かっぱれ、奴さん」を披露、本格派の踊りを堪能しました。続いて

酒井昭枝さんが朗々と「詩吟」を吟詠、またお寺の唯花ちゃんや青柳美乃ちゃんが見事

なオルガンを弾いて会場を盛り上げてくれましたし、坊守さん、唯花ちゃん親子で流行りの妖怪体操も踊ってくれました。

最後は古今亭志ん生の孫弟子と自称する「古今亭こんちき生」(前住さん)が落語「千早ふる」を演じて沢山の笑いを誘いました。大成功の楽しい新年会でした。

【乳・幼児の初参式受式を奨励募集】

近頃の世相で最も憂えるべき事象は家族の崩壊です。その中でも親の乳幼児への虐待、あるいは子どもが親への暴行といったニュースが報じられるたびに、恐ろしい時代になったものだと思わずにはいられません。

古来から「三つ子の魂百まで」と言われますが、幼い時の家庭環境から育まれたその子の性質は老年まで変わらないう意味です。そういうことから親子の誕生時の第一歩から宗教的情操、つまり敬いの精神、有り難うと言える感謝の心を築かねばなりません。初参式(しょさんしき)という行事は、新しいのちをめぐまれたよろこびをご縁とし

て、ご両親・家族がたが、そろってお寺にお参りし、阿弥陀さまの前で、親も子どもにその慈悲のなかに包まれているということに対して、感謝の気持ちから行う行事です。

仏の子の証しである可愛い式章とお念珠をいただく人生のスタートをしましょう。

今年の「初参式」は、花まつり(お釈迦さまの誕生日)の行われる4月5日(日)10時からです。

新生児、乳幼児のおいでのご家族には是非お参りくださるようお待ちしております。

【法座・行事案内】

○常例法座

一月十八日(日) 一時

講師：岩佐准光師(中野区正行寺)

○門信徒会役員会

一月十八日(日) 三時半

○和讃に学ぶ

一月二十四日(土) 三時

浄土和讃(大経讃) 前住職

○壮年会総会・新年会

一月二十五日(日) 二時半

○婦人会法座

二月七日(土) 一時

テキスト「歎異抄」

○壮年会法座

二月十一日(祝) 三時

【一月の掲示板のことば】

仏法を灯火とし
よりどころとせよ